

<報 告>

## 日本統治時代の台湾生活誌 ( )

柴 公 也

### (22) 花蓮港の街で

竹内アヤ (1924 年生) 花蓮港高女卒

私の父は唐津の士族の出で、陸軍の軍人でした。明治の終わり頃、金沢連隊から台北の軍司令部に転属になって渡台したのだそうです。中学に通ったかどうかは判りませんが、将校だったと思います。その後、風土病に罹って現地除隊したそうですが、台湾がよほど気に入ったのか、そのまま民間人として生活していたとのこと。同郷の知人が花蓮港にいることが判り、花蓮港市役所に入って役人になったのだそうです。母もやはり唐津の士族の出で、唐津の女学校を出ています。私は、この両親の下で大正 13 年に、花蓮港で生を享けました。父は、昭和 13 年に亡くなりましたが、母の才覚で何不自由なく過ごしておりました。

幼稚園には通わず、昭和 5 年に花蓮港小学校に入学しました。校舎は木造の平屋でした。花蓮港小学校は一学年三クラスで、男子組と女子組、それと早生まれの組が男女一緒でありました。ただ、5 年からは進学の関係で、男女は別の組になりました。私は早生まれの組でしたが、クラスに一人台湾人の女の子が入っていました。男子組にも一人台湾人の男の子がおりました。内地人の学校である小学校に入って来る台湾人は、お金持ちの成績優秀な子供たちでしたので、誰も苛めたりせずに仲良く遊んでおりました。

ただ、幾ら仲良くしていたとしても、時には何気なく言った一言が台湾人の級友の心を傷つける場合があったようです。戦後、同窓会で会った男の同窓生に、「僕は、あの女の同級生から『台湾人は臭いから嫌い!』と言われて、大変傷ついたことがある」と胸の内を打ち明けられたことがありました。また、「クラスのガキ大将に『明日、焼き芋を持って来い』と脅されたので、親には言えず、仕方なく小遣いで焼き芋を買って持って行ったことがある」とも回顧していましたから、幾ら仲良く過ごしていたとは言え、支配された民族の悲哀を味わわされていたのかもしれない。

昭和 11 年に花蓮港小学校を終えて、花蓮港高等女学校に入学しました。校舎は、煉瓦造りの平屋でした。花蓮港高女は、私が入学した時は一学年一クラスで、一クラ

ス50人でしたが、二、三年後には二クラスになっておりました。一クラスに5~6人台湾人の同級生がいましたが、先住民のアミ族の人はいませんでした。後になって、三年後輩に一人アミ族の人が入っていたということを聞きました。

当時は、まだ戦争の影響がなく、英語も四年までありました。裁縫や料理の時間もあり、また作法の授業は大変厳しかったことが思い出されます。私の組の担任は、奈良女高師を優等で卒業した若い先生でした。内地の出身でしたが、外地に出てみたいということで、台湾の高等女学校に赴任したのだそうです。先生は、後に台北の一女高に転任しています。

花蓮港高女の服装は、セーラー服にスカートで、夏服と冬服がありました。また、帽子も夏帽と冬帽がありました。靴は革靴でしたが、カバンは肩に掛けるタイプでした。ただ、登校時と下校時とでは、左右の肩に掛け替えて通学していました。小学校の頃は、高女生の姿に憧れたものでした。

台湾人の同級生は少数でしたが、学校内では分け隔てなく仲良く過ごしておりました。台湾人の同級生の家に遊びに行ったことがあります。大変立派な家でした。その級友のお父さんは内地に留学したことのある人で、開明的な人のように見えました。その友人は、卒業後東京のドレスメーカーに進学しましたが、帰ってくるたびに、必ずお土産を持って来てくれました。台湾に戻ってからは、台北の富豪に嫁いだそうですが、佳人薄命で若くして亡くなったそうです。

当時は、男女交際が厳しく禁じられていて、中学生は花蓮港高女の前を通ることは出来ず、わざわざ遠回りをして通っておりました。運動会や学芸会でも、たとえ実の兄妹であっても来場は禁じられていました。

花蓮港では、内地人と台湾人の関係は悪くはありませんでした。私の家は、結構大きくて築山のある庭も付いていたので、使用人を雇っていました。洗濯や家事を手伝う台湾人の女中さんがおりましたが、他にも子守をする台湾人の少女も雇っていました。

ただ、庭仕事は、アミ族の男の人に頼んでおりました。アミ族は市内にはおらず、郊外の村に住んでいたのですが、市内には自由に入出入りしていました。アミ族は親切で、終戦後でも、「何か困ったことはないか」と、いつも気遣ってくれました。アミ族の女性は日本の着物を欲しがるので、手持ちの古着をあげましたが、よく左前に着るので直してあげておりました。近所には、台湾人がいなかったのも、台湾人の子供と遊ぶということはありませんでした。

当時は、一視同仁と唱えられていて、台湾人も日本人という建前でしたが、台湾人やアミ族は内地人とは違うと思っておりました。台湾人やアミ族との結婚は、付き合いが全然なかったので考えたこともありませんでした。ただ、台湾は日本の植民地とは思っていませんでした。私にとってはかけがえのない自分の故郷だったのです。

花蓮港は内地人の造った街なので、内地人が多く住んでおりました。都市ガスはありませんでしたが、電気や水道は通り、中心街は舗装されていました。街の商店は、大部分内地人の経営によるものでしたが、何軒か台湾人の商店もありました。市場は、逆に台湾人の店が大部分でしたが、内地人の店も幾つかありました。街で内地人と台湾人が喧嘩することはなく、表面上は仲良く過ごしていました。

当時、内地人の女性は、着物を着ている人が多かったように思いますが、男性は洋装が主でした。台湾人の女性は、台湾服を着ている人が多かったのですが、一部洋装の人もおりました。男性は洋装の人が多かったような気がします。アミ族の女性は、好んで着物を着ていましたが、男性は洋装でした。ただ、アミ族の祭りに行きましたら、皆さん伝統的な民族服を着ておりました。

昭和 15 年に花蓮港高女を卒業し、台北で二年間三井物産に勤めることになりました。まだ、戦争の影響が薄かった時代でした。三井物産には台湾人の同僚がおりましたが、タイピストでした。上司に台湾人はいませんでしたが、給仕とか掃除婦は台湾の人でした。三井物産は、軍と関係が深かったので、台湾人は厳しい審査を経て入社していたのです。台北では、三井物産の人たちと一緒に下宿しておりました。

間もなく大東亜戦争が始まりましたが、映画館の入口に星条旗が描いてあって、その上を踏んで映画を見ていたということがありました。初めのうちは物資も豊富で、食料には不自由しませんでした。ただ、週に一回日の丸弁当を食べようというキャンペーンがありました。森永や明治のレストランでは、ランチタイムにバナナが二本皿に載せられていたという記憶があります。そんな程度で、終戦まで食料に困ったことはありません。

台北での台湾人との関係も別に悪くはありませんでした。もちろん、台湾人は内地人から一段低く見られていると思っていたでしょうが、だからと言って険悪な関係になることはありませんでした。

そのうち台北の爆撃が激しくなってきたので、昭和 19 年に花蓮港に戻り、花蓮港高女を卒業した妹と移民村の吉野村から来た人との三人で花蓮港の航空隊の地区司令部に勤務することになりました。私の仕事は、副官室の秘書のような役割でした。大勢の軍人の中、女性三名で当初は心細い思いもしましたが、皆様の親切に支えられて終戦まで勤めることが出来ました。

終戦の際、玉音放送を聞きましたが、劣勢とは言え負けとは思っていませんでしたから、「信じたくない」という気持ちでした。これからどうなるか判らず、不安で一杯でしたので「ホッとした」というようなことはありませんでした。上官たちは、言葉もなく佇んでおりました。一人自決しようとした人がいたのですが、皆に止められました。

花蓮港の飛行場からは、盛んに特攻機が沖縄に向けて飛び立っておりました。引き

揚げ後、私の夫になる人は浜松高等工業を出た人でしたが、特攻要員で待機中だったので。

終戦後、台湾人のヤクザたちが警察署に殴り込みを掛けたという噂を聞いたことがありましたが、私たち一家は別に苛められたりすることはありませんでした。満洲や北朝鮮からの引揚げに比べると申し訳ないくらい恵まれた引揚げで、衣類の他に夜具一組を持ち帰ることが出来ました。

終戦後、日本人の学校に通っていた台湾の友人たちは、日本人の友達がなくなったので、大分寂しい思いをしたようでした。特に、二・二八事件の時には、親日派ということで身の危険を感じ、山の中に隠れていた友人もいたそうです。実際、二・二八事件の時、友人の兄さんが行方不明になり、遺体が臨海道路の海岸に打ち上げられていたそうです。

終戦の翌年の3月の末に花蓮港から引き揚げましたが、途中アリューシャン列島で起きた大地震で発生した大津波に襲われて船が木の葉のように揺れ、一時は死を覚悟したこともありました。それでも、何とか鹿児島に着いたのですが、あたり一面が真っ白でした。一瞬雪景色かなと思ったのですが、桜島の噴火による火山灰でした。

直ぐ大分の中津の郊外の兄嫁の実家に向かいました。中津では、ちょうど桜が満開でした。台湾では、紅い緋桜しか見たことがありませんから、淡いピンクの雲のような満開の光景に、「ああ、日本に来たんだなあ」と実感しました。

日本に着いて驚いたことは、年寄りが多いということと汚い仕事を日本人がしているということでした。台湾では、年配の日本人は渡って来ませんでしたし、汚い仕事は皆台湾人が受け持っていたのです。中津の市街地も、花蓮港と同様に電気や水道は通っていましたが、全体的に見て花蓮港の方が近代化が進んでいるといった印象を受けました。

中津で一ヶ月ほど骨休めをして、静岡の佐久間の婚約者の家に向かいました。佐久間で式を挙げ、主人と二人で日本での新しい生活のスタートを切ったのでした。

### (23) 父母の思い出

高阿香(1926年生) 台南第二高女卒

私の父は、佳里公学校を出て1916年3月に台湾総督府国語学校の公学師範部を卒業し、台南市の末広公学校に勤めておりました。その頃、私の外祖父は、台南に製薬会社を設立して専務になる人を物色していました。この役目を自分の婿となる人に託すべきだと考えて父に白羽の矢を立て、母との結婚を条件として専務に就けたのです。

父は、最初母の実家に住んで外祖父の製薬会社を手伝っていましたが、数年後外祖父との関係がこじれてしまい、母と子供を連れて故郷の佳里に帰ったのでした。帰郷

後、銀行員として働いていましたが、佳里の庄 (\*村) 役場の助役に就いて、その後は佳里の庄長と街 (\*町) 長を十七年間務めました。また、父は、1940年11月に東京で開かれた紀元2600年の祝典に台湾人の代表として参列しています。

終戦後は、中学の校長になりましたが、途中で麻豆の区長に栄転しました。台南県長に立候補して当選した後、二期連続務めました。その後、再び教育界に戻って、高等商業の校長を八十二歳まで務めて退職しました。享年は八十四歳でしたが、幸福な一生だったと思います。

私の母は、麻豆の資産家の側室の次女として生を享けました。正妻は、大変な美人でしたが、体が弱く何時も阿片を吸っておりました。私の外祖父には妻が四人いましたが、四人とも三階建ての豪邸の一室に居を構えて、他の妻たちとはお互いに仲良く過ごしておりました。ちなみに、祖父にも四人の妻がおりました。

私の実の外祖母は、何時も外祖父の傍にいて世話をし、一切の家事を仕切っておりました。また、大変忠義心の篤い女性で、正妻が男児を産むと、女兒を産んだ外祖母は正妻の息子に自分の乳を飲ませ、自分の娘は他の家に養女に出したのだそうです。

それで、母は公学校に入学する前まで、養父母の家で育てられました。母の話では、その養父母は大変母を可愛がり、大金持の大家族の中で暮らすよりは、貧しい養父母の家で暮らしていた頃の方が幸せだったとのことでした。

母は、幼い頃から聡明で、学校の成績も抜群でした。ただ、纏足に悩まされ、公学校の三年頃までは毎日痛い足を引き摺って泣きながら登校していたそうです。厳格な外祖母は、母が学校で足布を緩めるのを防ぐために、紙切れを足布の間に挟んだのでした。もし、母が紙切れを落とすと、酷い折檻を受けなければならなかったのです。

外祖父は、何度か夜中に足の痛みに泣く母の足布をこっそり取り外し、そのため夫婦喧嘩になったこともあるそうです。幸いにも母が三年生の時、総督府が纏足禁止令を出したので母の足は救われ、苦痛から解放されたのでした。

当時、妾腹の子は良い学校に入れなかったのが、教育熱心だった外祖父は母を正妻の戸籍に入れ、十三歳で公学校を卒業した母を、台北の台湾総督府国語学校の附属女学校 (\*台北第三高等女学校の前身) に入学させました。

1918年3月に、附属女学校の技芸科を卒業した後、外祖父の意向で、製薬会社を手伝っていた父と結婚しました。母は結婚しても、子供が出来るまで台南の豊学校で先生を続けていたそうです。戦時中には、愛国婦人会から模範的な愛国婦人として表彰されたこともあります。日本統治時代の官吏の妻として父を支え、家計を遣り繰りしながら八人の子供を立派に育て上げた、まさに台湾女性の鑑とも言うべき女性でした。その母は、九十八歳という長寿を全うして天に召されました。

この母と父との結婚については、昔の漢族の習慣に関する面白いエピソードがあります。母は、女学校の卒業の年に外祖父の強い意向で父と婚約させられたのですが、

卒業後は外祖父の家に戻り、家事を手伝っていたそうです。その時は、既に父も外祖父の家に寄宿して外祖父の会社に勤めていたのです。

ですから、母と父は婚約者同士で同じ家の一階と三階に住んでいたのですが、なんと二年間一言も言葉を交わしたことはなかったのだそうです。もちろん大きな家ですから、一階と三階の入り口は別々でした。お互いに将来は自分の伴侶になる人だということも解っていて、顔も知ってはいたのですが、二人だけで会ったことはなかったとのことでした。

それが、二年ほど経ったある日、父が病気になったのだそうです。その時は、母の兄で東京帝国大学の医学部を出た伯父が一階で開業しておりました。ただ、この伯父は不運にも戦争中に疎開先で悪性マラリアに罹り、早世してしまいました。

この伯父に、父は治療を受けていたのですが、母は祖母に見舞いに行けと言われていたので、初めて父を見舞ったのだそうです。ただ、その際、どんな言葉を交わしたのか、あるいは言葉は交わさなかったのかは聞いておりません。そのことがあってから、まもなく結婚したのですが、祖父の時代とは違って、父の妻は母一人だけでした。

私が佳里公学校に入学した時、男の子は90人以上いましたが、女の子は16人だけでした。私の時代でも、地方では女の子を公学校に通わせない家が多かったのです。クラスは男子のクラスが一つと男女混合のクラスが一つでした。男女混合のクラスは、男女は一緒に座ることはなく、左右に分かれておりました。

先生方は、皆真面目で優しい先生方で、それほど厳しくはありませんでした。ただ、一度何かの件でクラス全体が罰を受け、全員が竹の棒で頭を叩かれて瘤が出来たことがありました。

日本語は一年の時から台湾人の先生から習いました。一年の終わり頃には何とか日本語が話せるようになっておりました。四年の頃には、学校で台湾語を使うと、罰として後ろに立たされたり手の平を叩かれたりするようになりました。五年の頃には、休み時間でも日本語を話すようになっていました。

私の家は一応国語家庭でしたが、祖父と祖母は日本語が出来ませんので、家では台湾語を使っておりました。

私が公学校の頃、一番親しくしていたのは佳里長老教会の牧師の娘で、福子さんという人でした。教会は役場の近くだったので、二人で毎日遊んでおりました。日曜日には神妙に教会で牧師の説教を聞いていましたが、献金の袋が回る頃には二人でそっと抜け出しておりました。当時、何か困ったことがあると「お助け下さい、イエスさま」と祈っていましたが、私は信者にもなれず、洗礼を受けることもありませんでした。ただ、牧師の家族が仏教の悪口を言うのを聞くと、なぜか反感を覚えておりました。

昭和13年の4月、南部の台湾人女子の最高学府である台南第二高等女学校に入学

しました。台南第二高女は、一クラス 50 人で三クラスありました。内地人は二割の 30 人ぐらいおりました。成績のトップは、たいてい厳しい競争を潜り抜けてきた台湾人の生徒でしたが、内地人でも学年のトップになった人が一人おりました。その人は、佳里公学校の校長の娘でしたが、成績優秀だけでなく品行方正な人でした。ただ、持病があって、卒業後は上級学校にも行かず、先生にもなりませんでした。

内地人の生徒は圧倒的な少数派でしたので、皆おとなしくて台湾人を馬鹿にするような人はいませんでした。学校内では皆仲良く過ごしていました。ただ、後輩が先輩に礼をしなかったりすると、先輩に呼び出されて説教されておりました。

自宅からは通えなかったのが寮に入ったのですが、一年上の佳里から来た先輩が走って来て、「あなたの部屋の室長の中村さんはとても親切な人で、佳里から来たと言えば、良く面倒見てくれるわよ」と教えてくれたのです。私は、はっとしました。

以前、父が役場から帰って来て、不機嫌な顔で「今度来た内地人の助役で中村という人は、実に生意気だ。私が先に『おはよう』と挨拶しても、『うん』と言ったきりで、新聞から目を離さない」と言ったことがあるのです。それを聞いて、私は、内地人には優越感があるから仕方がないと思っておりました。父と仲の悪い助役の中村さんの娘から親切にされるはずはないですから、困ったと思いました。

中村さんは内地へ修学旅行に行っていたので、一週間ほど経ってから、やっと顔を合わせました。私は、内心びくびくしてお話するのが恐かったのです。「あなた、佳里から来たんですってね」と話し掛けられても、すぐには言葉が出ませんでした。

私は、その中村美佐子という室長さんと床を並べて、女学校の最初の年を過ごしました。私の心配はお姉さんのように優しい美佐子さんの心配りで消えてしまいました。同室には、服部さんという沖縄の人で、夢二の絵から抜け出たような綺麗な新入生がいましたが、室長的美佐子さんに一番可愛いがられたのは私でした。

最初の休暇で、佳里に帰った時、父が上機嫌で、「中村さんが、お前のことを娘さんから聞いて喜んでたよ」と言ったのです。二人の仲が娘たちのことで好転したのは嬉しいことでした。中村さんは間もなく隣の西港の庄長に栄転して、新築の素晴らしい宿舎に移りました。美佐子さんに「遊びに来ない？ 竜宮みたいな所よ」と誘われたのですが、行く機会もなく一度外から眺めただけでした。

引き揚げていく時に交換した美佐子さんの和服姿の写真は、今でも私の手箱に大事にしまってあります。写真を眺めながら私の臉に浮かんで来るのは美佐子さんの運動着姿です。陸上選手として母校のために走り、また校旗の旗手を務めていた成績優秀で品行方正な生徒でもありました。卒業後は、西港で終戦まで公学校の教員を務め、優秀な生徒を多数社会に送り出したのです。

女学校の四年生の時、家から通知が来て、改姓名の届けを学校に出すようにとの父の手紙が添えてありました。「高氏阿香」が「高本薫」に改められておりました。そ

の頃、続々と改姓名の届けをする人が出てきましたが、黄は「廣田」や「廣川」、林は「林田」、張は「長田」のように、新姓の一部に旧姓を残す人が多かったのです。

翌日、学校に行き届けを出すと、なんと学年主任の先生が大きな声で怒鳴ったのです。「みんな旧姓に未練があるのか！それなら改姓名などしなくてもよい。我々内地人は、ごっちゃにされて迷惑千万だ！」と言い放ったのです。普段は真面目な先生の言葉でしたから、その声を聞いて私は自分の耳を疑いました。同時に、これが自分の尊敬する先生の言葉だろうかと非常に悲しい思いをしました。

改姓名前は、先生からは「高氏阿香」、級友からは「阿香さん」と呼ばれていました。改姓名後は、先生からは「高本」と呼ばれるようになりましたが、級友たちからは相変わらず、「阿香さん」と呼ばれていたように思います。

一度、校長先生が朝礼の訓話で、登校の途中に校則の帽子を被っていない生徒たちを見たとして、「今日、帽子を被って来なかった人は、正直に手を挙げなさい」と言ったのです。怒られると思った生徒たちは、誰も手を挙げませんでした。すると、校長先生は、「誰もいないのか？すると、私が嘘を付いたことになるな」と呟いて、訓話を止めて黙ったまま校長室に入って行ってしまいました。早速犯人探しが始まり、学年主任の先生は怒って、「お前たち台湾人は、台湾根性があるから駄目なんだ。内地人の生徒だったら正直に手を挙げて」と怒鳴ったのです。

その後、全校の生徒が講堂に集まって討論をすることになりました。その際、新垣という若い先生が「私は台湾で生れたから台湾人です。台湾根性があるから台湾人は駄目で、内地人は上等だとは思っていません」と言って生徒を庇っておりました。結局、生徒たちが正直に手を挙げなかったのが悪いということになり、校長先生のところに行き謝ることになりました。生徒たちは、別に罰を受けずに一件落着きました。

時には、先生の心無い発言で嫌な思いをしたことはありましたが、私は短歌部に所属し、概して楽しい学校生活を送りました。

卒業間近になった頃、「特志看護婦志願」についての調査がありました。志願者は父母の同意を得る必要があったのですが、「わあ... 良いチャンスね！私たち慰問袋送るから頑張るね」と下級生に励まされたので、各自志願書を持って同意の印を取りに出掛けました。

私も、父に同意を求めました。「どうしても行かねばならないのか？母さんが心配するよ」と、父は渋々印鑑を取り出したのでした。「心配することはないわ。一年だけだから...。それに可愛い子には旅をさせると言うでしょう」と、私は偉そうな口調で父を説き伏せたのでした。寮に戻ると、何人かの方が親の反対に遭ってがっかりしておりました。その時、私は判を押す父の手が震えていたことを思い出したのです。親を心配させるようなことは止めようと、私は志願を思いとどまりました。

一年経って、私たち十八回生は、沢山のお土産話を携えて帰って来た特志看護婦の



歓迎会を開いたのです。「行けば良かった」と、その時は思いましたが、その後に出て行った特志看護婦は一年の期限を越えても帰れず、終戦後にやっと帰って来たのです。

女学校を卒業して、二年ほど台南の薬局に就職して会計を担当しておりました。その後、台南の港公学校の先生になって、二年の女子組を担当しました。当時は、戦争の影響で、男の先生は脚にゲートルを巻き、女の先生はモンペやズボンをはいて教えておりました。

空襲が激しくなってきたので、先生を辞めて実家のある佳里の商工銀行の支店に勤めている時に終戦を迎え、私の日本時代の青春は終わったのです。

## (24) 与那国島から台湾へ

宮良 作 (1927年生) 基隆中学；台北二中；台北帝大予科一年

私の父は、与那国村の助役をしておりました。父は、三歳の時に石垣島に渡り、登野城小学校に入りました。高等科を終えてから那覇商業に入学し、一年から四年まで特待生で通したそうです。それが、祖父が長男に任せて経営していた店が破産してしまいました。それで、祖父に、「家が大変だから、勉強する必要はない」と言われ、四年で学業を中断して石垣島に戻って来たのだそうです。

実は、父は正妻の子ではなくて、首里の王府から与那国島の蔵元 (\* 役所) に派遣されていた祖父が現地の女性に産ませた子供でした。石垣島の本家が潰れたのに、与那国の現地妻の子供に勉強させる訳にはいかないということだったのです。

父は、最初石垣島で小学校の教員をしていましたが、請われて 27 歳で与那国村の助役に就きました。税制改革に取り組んでいたのですが、上からの圧力で改革が潰され、助役を解任されてしまいました。それで、仕方なく台湾の彰化市役所に入って役人になったとのことでした。

私が彰化小学校に転校したのは、与那国小学校の四年の終わりの時でした。与那国小学校の先生は石垣島の先生が大部分で、本土の先生はおりませんでした。先生だけではなく、役人や商人の中にも本土から来た人間はおらず、私が初めて本土の人間を見たのは台湾に渡ってからです。

与那国にいた時は、標準語を使うのは学校の授業の時だけで、家では方言しか使いませんでした。与那国の方言は標準語との違いが大きく、最初標準語を習った時はまるで違う国の言葉を習っているような感じでした。学校では方言を使うと、小さな木で出来た方言札を首にぶら下げさせられました。その方言札を外すためには、誰か他の級友が方言を使う現場を押さえなければなりません。方言を使う級友がいない場合には、誰かを後ろからいきなり叩いて方言で「痛い！」と言わせ、それを先生に告げ

て外してもらおうということをしておりました。

ですから、学校で標準語を習ったと言っても、すらすら話せるというものではありませんでした。どうしても教科書を棒読みするような感じで与那国方言のなまりが出てしまうのです。彰化小学校での国語の時間に教科書を読まされたのですが、変な読み方だと先生に叱られ、級友には笑われました。時には琉球人と言われ、私は完全に方言コンプレックスに陥り、無口で無気力な少年になってしまったのです。

間もなく、父が基隆に転勤することになって、私も基隆の双葉小学校に転校しました。双葉小学校に転校しても、方言コンプレックスは続きましたが、一、二年経ってなんとか普通に話せるようになり、友達も出来るようになりました。双葉小学校には、クラスに2~3人の台湾の子弟がおりました。ただ、喧嘩したり苛めたりすることはなく、普通に付き合っておりました。

双葉小学校を卒業して、基隆中学に入学しました。基隆中学は、一クラスに5~6人の台湾人がいましたが、台湾人の生徒を苛めるというようなことはなく、少なくとも表面的には仲良く付き合っておりました。

ただ、私は沖縄の人間ということで、よく「ホイちゃん」と呼ばれておりました。私は水泳が得意で、リレーでピリのチームを、アンカーの私の力泳で優勝させたことがありました。すると、先生までが「お前は凄いな。まあ、ホイちゃんだからな」と言っておりました。

最初は、基隆にいる沖縄人は海に潜って魚を取っていたので、「海に潜って魚を取る男」の意味だと思っておりました。戦後になってから、九州の北部の方言で「ホイト」とは、「乞食」の意味だということが判りました。

三年に上がる際に、基隆市役所に勤めていた父が沖縄差別のせいで昇進が出来ないという理由から、台北の市役所に移ることになりました。父は、よく「本土から来た連中はろくに仕事も出来ないくせに台湾人よりも高い給料をもらっている」と不平を漏らしておりました。私も基隆中学での沖縄人に対する偏見に嫌気が差していたので、父に相談して主に台湾人の学校である台北二中に転校することにしました。二中では、一クラスに5~6人の内地人の生徒が在籍しておりました。台湾人の学校を選んだのは、台湾人なら沖縄の人間を馬鹿にしたりすることはないだろうと思ったからです。

実際、二中では「ホイちゃん」と呼ばれることはありませんでした。ただ、内地人の生徒が宗主国の人間であることを笠に着て、台湾人の級友に尊大な態度で接することがありました。二中の内地人の生徒は、内地人の学校の一中や三中に入れられないような落ちこぼれの生徒が多かったので、優秀な台湾人の生徒をやっかんで不遜な態度を取っていたのではないのでしょうか。

また、私は基隆中学では級友に殴られたことはありませんでしたが、二中では一度級友に殴られたことがありました。それは、内地人と台湾人の級友がトラブルを起こ

したので、級長を任されていた私が台湾人の級友を庇ったからでした。私は、内地人の生徒よりは台湾人の生徒と親しく付き合っていて、友人も多かったのです。

すると、内地人の級友は、「お前は生意気だ！台湾人を庇うとは」と喚いて、一発見舞ってきたのでした。当時の台湾では、内地人が一等国民、沖縄人が二等国民、台湾人が三等国民だったのでした。

当時の台湾の教員は、台湾人を日本人化するための皇民化教育の先兵でした。二中でも、軍事教練の時間があって、未来の皇軍兵士として徹底的に日本精神を叩き込まれ、厳しい軍事訓練を課されておりました。配属将校の中には、台湾人の生徒をいたわってくれる良心的な軍人もいました。その将校は、京都帝大の出身だったそうです。

三中を卒業して、台北帝大予科の文科甲に入学しました。予科は、軍隊式の中学とは違って全く自由な雰囲気、素晴らしい先生方が揃っておりました。配属将校も学生を殴るといふようなことはありませんでした。

予科では、内地人、沖縄人、台湾人の区別は一切なく、皆平等に付き合っておりました。皆仲が良く、下駄を履いて台北の街を闊歩しておりました。皆哲学的な難解な言葉を使い、夜を徹して議論しておりました。学生の中には、先生に脅しをかけるような猛者もいて、先生は驚いて逃げて行ったそうです。

予科の一年で終戦を迎え、翌年与那国に帰って来ました。与那国にとって、台湾は異国ではありませんでした。晴れて空気の澄んでいる日には山並みが遠望できる隣の大きな島という感覚だったのでした。与那国は時間も台湾時間で、紙幣も台湾銀行券が流通しておりました。就職も台湾に行く場合が多かったのです。ですから、私は今でも本土の人間よりは台湾人の方に親近感を持っているのです。

## (25) 阿里山の歌声

高菊花 (民族名；パイツ・エ・ヤタウヨガナ) (1932 年生) 阿里山小学校；台中師範卒

私の祖父のアパイは先住民のツォウ族で、1877 年頃の生まれです。ツォウ族の伝統に従い、上の門歯二枚を抜いておりましたが、刺青はしていませんでした。祖父は、子供の頃は体が弱くて狩に行けなかったそうです。それで、軍隊が好きだった祖父は駐屯地に行って毎日軍隊のすることを見物していたのだそうです。

そのうち軍隊に可愛がられるようになって日本語を覚え、通訳の仕事をするようになったとのこと。次第に、土匪狩りにも加わるようになり、功を立てて巡査補に採用されたのだそうです。これは、当時のツォウ族にとっては最高の出世で、いわばツォウ族のエリートでした。

祖父は、1899 年に半年間の試験的教育を受けた後、嘉義の公学校に入学しました

が、半年も経たないうちに退学させられて、山地の派出所の勤務に就いたのです。祖父は職務に精勤したのが認められ、1900年に、第二回「生蕃内地観光団」にツォウ族から唯一人選ばれて、八月から二ヶ月間、神戸から仙台まで各地を視察したそうです。

内地観光を通じて文明の力を知った祖父は、その後ツォウ族のリーダー格になったのですが、不運にも、1918年に川で爆薬を使って漁をしていた時、誤って爆死してしまったそうです。父が蕃童教育所に通っていた10歳の時でした。残された祖母は、ツォウ族の習慣に従い、子供たちを置いて他家へ嫁いでいったのです。

父、ウオーグ・エ（\*英語の‘of’に当たる）・ヤタウヨガナ（\*漢族名；高一生、日本名；矢多一生）は、祖父アバイと祖母アサコ（\*刺青も抜歯もせず）の三人兄弟の末っ子として、1908年に阿里山の達邦のトフヤ部落に生を享けました。父は、1916年に達邦蕃童教育所（\*五年制）に入所しましたが、三年の時に祖父を事故で失い、母も他家へ再嫁してしまいました。幸い、教育所の教官を兼ねていた派出所の巡查（\*教育所の教官は、身分上は警官であった）の好意により、巡查の官舎に住み込んで学業を続け、1921年に教育所を終えることが出来ました。

先住民の子供としては十分な学歴で、後は山地での狩りや畑仕事に従事するのが普通でした。それが、嘉義在住の警部に、その聡明さを見込まれて嘉義の小学校の四年に編入され、警部の家に寄宿して内地人の小学校に通うことになりました。小学校では、「矢多一生（やたかずお）」と日本名を名乗り、内地人の生徒に伍して優秀な成績で卒業したそうです。

そのため、1924年に推薦により、内地人にとっても難関だった台南師範学校（\*普通科五年；演習科一年）に入学できたとのことです。父は、師範学校では官費を支給されて寮で生活していましたが、特に音楽が得意で、音楽部に所属して活躍していたそうです。寮では、内地人や台湾人の学友と分け隔てなく付き合い、青春の夢を語り合っていたものと思われます。

1930年に、演習科を良好な成績で卒業して正式の訓導の資格を得、同時に巡查の辞令を受けて教育担当の巡查として、母校の達邦蕃童教育所で教鞭を執ることになったのです。父は、蕃童教育所用の教科書を使って何時も一所懸命に教えていましたから、自分の仕事には満足していたのだと思います。また、教育所にはオルガンもあって唱歌も教えておりました。

母の湯川春子は同じトフヤの生まれで、10歳を過ぎてから教育所に入所し、達邦蕃童教育所を優等で終えています。卒業後は、台南市の理蕃課の課長の家に住み込み、二年間女中兼行儀見習いとして家事を手伝っておりました。その後、父との縁談が持ち上がり、1931年の八月に、父と日本式で結婚したとのことです。母は着物で、父は官服で神社に参拝して式を挙げたのだそうです。母は18歳で、父は23歳でした。

ちなみに、父はキリスト教に入信しておりましたが、母は神道でした。母も日本語は流暢で、家では日本語だけで話しておりました。母は普段着物を着て下駄を履いていましたが、父は洋装でした。

当時、ツォウ族の女性は農作業の時は伝統的な民族服を着ていましたが、集会有一些の時には、若い女性は着物を着て下駄を履いておりました。これは、理蕃課が着物を着るようにと強制したのではなく、内地人の奥さんたちの着物姿に憧れて自分から着ていたのです。

私の周りは全て内地人でしたから、幼い時から「喜久ちゃん」と呼ばれて、内地人の子供と遊んでおりました。そのため、ツォウ語は聞けても話すことは出来ません。私は最初から日本名でしたが、後で、近所の人から「パイツ」という民族名をつけてもらいました。私にとっては「喜久子」という名前が一番馴染みがあって、今でも昔からの知人には「喜久」ちゃんと呼ばれています。母も民族名は「パイツ」でしたが、皆に「春子」さんと呼ばれていましたので、別に困りませんでした。ちなみに、養女に出された妹もやはり「パイツ」という名でした。ツォウ族の場合、名前の種類が少なかったのでしょう。

また、家は日本家屋の警察官舎で、畳の部屋や風呂もあり、食事でも正座して日本料理を食べていましたから、生活様式は全く内地人と同様でした。学校に入る前は、周りの内地人の子供と同じく、着物を着て下駄を履いていたのです。家には、親類の女の子が手伝いを兼ねて行儀見習いに来ておりました。夫婦仲は極めて良く、長女の私を筆頭に11人の子宝に恵まれました。

父は、私がツォウ族の部落に遊びに行くことを許してくれませんでした。母方の伯父は、「イヨイホ」と呼ばれる祈禱師でしたので、迷信退治に専心していた父としては、私がそのような祈禱師の家に遊びに行くのを望まなかったのでしょう。それでも、私は父の目を盗んで、時折伯父の家に遊びに行っていたのです。

父は、私を内地人と同じ環境で教育を受けさせようと思っていたので、私を台南の南門小学校に入学させることにしました。その際、日本語の試験がありましたが、日本語で育った私にとっては難しいものではありませんでした。ただ、何か事情があったのか、入学を許可されたのは一年後でしたから、同級生より一年遅れて入学しています。南門小学校は、一学年四クラスで、男女二クラスずつでした。一クラス40人で、台湾人の同級生が一人おりましたが、公学校の校長の娘とのことでした。後に、高雄の財閥の夫人に納まったそうです。南門小学校は、二年の途中まで通いましたが、喧嘩したり苛められたりしたことはありませんでした。南門小学校では、制服を着て靴を履き、ランドセルを背にして通っていました。

南門小学校では、男の子たちは台湾人のことを「本島人、本島人」と言って馬鹿にしておりました。台南では、台湾人と内地人が一緒に遊ぶということは、あまり見か

けませんでした。

台南では、台南一中に通っていた、父とは十歳以上年の離れた異父弟の叔父と一緒に住んでおりました。叔父は、その後台北医学専門学校に進んで、終戦後に台湾大学に統合された医学部を卒業しています。ツォウ族では、最初の医者でした。

二年生になると空襲が始まったので、学年の途中で阿里山小学校に転校しました。阿里山小学校は、一学年が男女共学の一クラスで、一クラス 20～30 人の小さな学校でしたが、席は男女別でした。阿里山小学校は家から遠いので寄宿舎に入っておりました。父が教育所の先生だったので、蕃人の娘だからといって先生方に馬鹿にされたりしたことはありませんでした。

ただ、五年生の時、農業の実習の時間に、苛めっ子の男の子に「生蕃！」と罵られて腹が立ったので、喧嘩して取っ組み合いになったことがありました。私は同級生より一歳年長でしたから、背が高くて力も強く、その男の子を組み伏して懲らしめてやりました。

後で先生に呼ばれて、「おまえ、どうして男の子と喧嘩したのか」と聞かれたので、「先生、だってあの人が私のことを生蕃と言ったんで、それで喧嘩になりました」と答えました。すると、先生は「喧嘩両成敗」と言って、私のほっぺは軽く叩いたのですが、その男の子のほっぺは強く叩いたのです。

あの当時は高砂族と言われていましたが、それまでは本当に自分は内地人と同じだと思っていたので、「生蕃！」と罵られて腹が立ったのです。小学校の時、どちらかというが高砂族と内地人の方が台湾人と内地人の関係よりは、うまくいっていたような気がします。

父は師範学校を出たので判任官でした。しかし、内地人の福島さんは達邦駐在所の所長でしたが、高等科しか出ていませんでしたので、父には頭が上がりませんでした。当時、警察の給仕は本俸が 5 円でしたが、父は 50 円の銀行員なみの本俸を支給されておりました。母は普段着物を着ていましたが、わざわざ東京の三越から取り寄せておりました。

父は、1940 年の五月に、「高砂族青年内地視察団」の一員に選ばれ、門司から東京まで二十日間に渡って各地を視察したことがありました。祖父に続いて親子二代の内地視察でした。帰台後、「二十日間の内地旅行で、少なくとも十年間の進化を獲得できた」と語っていましたから、内地の発展した姿に大いに刺激を受けて、ツォウ族の近代化のために尽力するという決意を固めたものと思われます。

父はとても聡明で立派な人でした。師範学校を出ただけですが、非常に学問のある人で、私は非常に尊敬しておりました。ですから、父に言われたことは皆責任を果たしてきました。父は、本当に音楽が好きで、師範学校を出たら内地へ音楽を勉強しに行きたかったらしいのですが、ツォウ族の将来を考えて音楽の道は断念し、ツォウ族

の子弟の教育と生活の近代化に専念していたのです。その苦勞には筆舌に尽くしがたいものがあったと思います。

例えば、ツォウ族の習慣では、人が死んだら家の中に埋めて、その上に平たい石を置くのですが、それがお墓なのです。そして家の中が一杯になったら引越するのですが、不衛生だということで、父は共同墓地に埋葬するようにと説得していたのです。時には、死者が出た家の人が朝早く弁当を持って農作業に出掛けた後、教育所の生徒たちを引き連れて行って死体を掘り起こし、共同墓地に埋めるなどという極端な手段を使ったこともあるそうです。

もちろん長老たちはカンカンに怒り、ツォウ族の伝統を破壊する者として父の暗殺を企み、刺客を差し向けてきたそうです。それで、父は何時も仕込み杖を持っておりました。刺客が後ろから近付いて父を殺そうとする時、後ろを振り向かず、ただ仕込み杖をはずして、カチンと音を鳴らすのだそうです。すると、刺客が慌てて逃げに行ったと言うのです。

父は村のために尽くし、内地人と一緒に、「畑を作ろう」、「竹を植えよう」、「杉を植えよう」、「山茶花を植えよう」、「水田を造ろう」と、説きまわって皆で共同で田の水路網を整備しました。それで、他の村より生活がずっと豊かになったのです。

それなのに戦後、ある若い人が「高一生のせいで高山族の進歩が遅れた」とぼざいたのです。私は本当に癪に障ったので、その人のお兄さんに、「あんたの弟は何も事情を知らないくせに、そんなことを言うとは生意気だ」と怒鳴りつけてやりました。すると、「許してくれ、あいつは国民党の教育を受けているから」と謝ったのです。

ある時、父は私を高雄の港の海軍の事務所連れて行ってくれたことがありました。高砂義勇隊として出征して散華したツォウ族の若者の遺骨を受け取るためでした。ツォウ族の若者たちは義勇隊に入りたいがために、15、6歳の子供までが徴兵年齢をごまかして義勇隊に入っていました。ですから、国民党は、日本軍が高砂族を無理矢理義勇隊に引っ張って行ったと宣伝していますが、実際には喜んで義勇隊に入っていたのです。

事務所に行くと、海軍の事務官らしい人が教壇みたいな一段高いところに立って名前を呼んでいるのです。そして、私の父を呼ぶ時に、「おい、そこにおる生蕃」と言い放ったのです。それを聞いて、私は「悪い奴だなあ、あの内地人は」と、本当に悔しい思いがしましたが、父は知らん振りをしておりました。事務官は、父の着ている服が気に入らなかったのだと思います。内地人の自分が国民服なのに、高砂族の父が判任官の服を着ていたので、内心腹が立ったのでしょう。

終戦の時、私は阿里山小学校の六年生でしたが、本当に悲しい思いをしました。父や警察の福島さんなども、何日も食事が喉に通らないくらい落胆しておりました。ある日、父は酔っ払って、コートを着たまま杉の木の枝に足でぶら下がっていたのです。

が、コートが顔を覆った状態で「僕たち台湾人はコウモリだ」と言うのです。昔はオランダ、清が治めて、次は日本でしたが、その時は台湾が国民党のものになるということを知っていましたから、それで嘆いていたのですが、その姿は今でも忘れられません。

当時は、国民党のことは何も分かりませんでした。私の父は、日本時代から達邦では一番位の高い官吏で、職位は巡查長だったと思います。終戦後も公務員でしたから、初めのうちは悪くはなく、国民党に機嫌を取られておりました。ですから蒋介石にも二回会っていました。父は、台東や花蓮港とか宜蘭に行つて、先住民の自治運動の様々なことに関わっておりました。

その自治運動が禍根となり、台湾独立を何よりも恐れていた国民党の逆鱗に触れて、命を狙われるようになったのです。その頃から、父が何時も私に、「弟や妹を頼む」とか、「親が亡くなったら大変だ」とか、そんなことを言い始めました。お墓参りに行った時にも、「もしものことがあれば、お父さんの墓はここにしてくれ」と、様々なことを私に言い残していたのです。

私は、終戦後師範学校（\*四年制）を出て、国民小学の教師をしておりましたが、アメリカに留学することになりました。それで、教員を辞めて英語を習っていた時ですが、嘉義県の警察局から「あなたのお父さんが台北に連れ去られた。手紙は警察署に残してあるから取りに來い」という電話が来たのです。さっそく取りに行くと、「家計が苦しくなったら、どこそこに行つてお金を受け取りなさい。それから、兄弟や家の世話をするように」とか、「どこか行きつけの店に行つて、お母さんに上海服を作つてあげなさい」とか、そういうことが書いてありました。父は、沢山手紙を私にくれましたが、父が亡くなった時、後難を案じて皆捨ててしまいました。父の作曲した「つつじの山」や「春の佐保姫」は、父が五線譜で書いて送つて来たものです。

父は、高砂族のために苦勞に苦勞を重ねたのですが、その努力も虚しく、逮捕されて一年半後の46歳の時に、国民党に虫けらみたいに銃殺されてしまいました。父が連れ去られた時、弟妹たちは皆小さく、一番上の私は二十歳でした。ですから、母と二人で、どれだけ辛い思いをしたか分かりません。

私は、取り調べ室に連れて行かれて、「きついだらう」と誘導尋問されて、とても苦しい目に遭いました。寝かしてくれずに、「あんたは何月何日にこんなことやった」と、一晩中そんなことを言われたら、本当にそのように思つてしまいます。それでも最後まで頑張つて、「私はやってない」と言い張りました。

私はブラックリストに載せられていたので、高雄に逃避して、そこで習つた英語で歌を歌うことにしました。幸い歌が売れて、それで生活できるようになりました。父と約束した弟妹たちの世話は、それで果たすことが出来たのです。

私も人生の荒波を乗り越えて、いつの間にか八十の坂を越えてしまいました。今で



も目を閉じると、阿里山の家で、父のオルガンに合わせ、「荒城の月」や「月の砂漠」を合唱していた、幸せだった頃の両親の歌声が耳の奥に鳴り響いて来るのです。

続